

龍神さま

りゅうじんさま



作:近藤せいけん



昔々、相模の国の煤ヶ谷（すすがや）村（清川村）を流れる大川（小鮎川）の深い淵（ふち）に竜神さまが住んでいました。

その年は春から、雨が降らず、田や畑も枯れはてて、何も作物が育たなくなっていました。村人は困りはてて、周辺の村人と話し合っ、雨乞いのお祈りをする事となりました。煤ヶ谷村に集合しました。

「こんなに雨が降らないのは、長く生きているが、初めてだ」と村の長老がいました。

「本当だ、このままでは、わしらは、飢え死にってしまう」

「何とか、しなければ・・・」

付近から集まった、村人も困りはてていました。

「そうだ、大川（小鮎川）の深い淵（ふち）に住むと言う、竜神さまにお願いしたら、どうじゃろう」と村の長老が言いました。

「それに、大川（小鮎川）の深い淵（ふち）の辺りだけは、こんな日照りのなか、今でも、豊かに、水は流れている。不思議だ」

「そうじゃ、それがいい。お願いしよう。そうしよう」

「 そうだ。そうだ」と口々に叫んだ。

村人は皆で、揃って、竜神さまが住んでいる、深い淵（ふち）の岸に出かけた。

村々の長（おさ）が声を合わせて、竜神さまに呼びかけた。

「竜神さま。竜神さま、どうか竜神さまのお力で、この村々に雨を降らせて下さい」

「お願いいたしますだ！ お出ましを！お出ましを！」

村人たちはひれ伏して、手を合わせ、竜神さまに必死に呼びかけた。一時が過ぎた。

かすかに、深い淵（ふち）の底から、水がぐるぐると、巻き上がり、だんだんと強く、早くなり「ゴウ～ゴウ～」とお腹に響く振動と共に、水が川面より上昇し始めた。

村人たちは必死に祈った。

大きな、大きな、頭に、冠をつけ、長い首をした、龍神さまが、お供の大ナマズを従えて水面に浮かび上がった。

「これ、村の衆、わしはこの淵に住む竜神じゃ。」

「わしを呼んだか。して、何ようか」

村の長（おさ）が答えた。

「竜神さま。竜神さま。お願いで、ごぜいますだ。この春以来の日照りで、困っています。このままいけば、わしらは、飢え死にして、しまいますだ」

「どうか、どうか、竜神さまのお力で、雨を降らせて下さい。お願い、申しますだ」と村人は頭を下げ、必死に頼んだ。

竜神さまは黙って、聞いていた。

「その願い、聞き届けないわけではないが・・・」

「どうか、どうか、お聞きとどけください」

「なんなりと、竜神さまのおいつけにしたがいます」

「しかと、相違ないか！」

「はあ～必ずや！ お約束、申します」

「それでは、申しわたす」

「この村々は、深い丹沢の山々に囲まれている。豊かな木々が茂っている」

「雨が降り、山々に水が貯えられ、そして木々が水を吸い上げ、水を少しづつ、川に流す」

「近頃。人は山の木々の手入れを怠り、木々が枯れ、山が荒れている」

「山を下った水が、一挙に川に押し寄せ、激しい流れになり、鮎や小魚を下流まで押し流す、被害が出ている」

「山を大事にしないからだ・・・」

「嘆かわしいかぎりじゃ。おぬし達の代で、山をつぶすのは座視できぬ」

「この、よき、自然のいとなみを大事にいたせ」

「よいか、村人が力を合わせ、末代まで、山を木々をそこに生きているもの、全てを大事にする
と約束するのであれば、

おぬし達の願い、聞きとどけよう」

「はあ、必ずはお約束いたします」

「そうか、それは、良きこと。さらばじゃ」

音もなく竜神さまの姿は消えた。

そして、まもなくザアザアと激しい音とともに、雨が降ってきた。

「雨だ！雨だ！わあ、雨が降ってきた」

「ありがたや、ありがたや、竜神さまのおかげじゃ」

「救われた、ありがたや、竜神さま」

村中の人々が飛び出して、歌い、踊り、竜神さまに感謝した。

翌日も一日中、降りそそぎ、山々に、田に、畑に、降りそそいだ。

されから数日間、降り続いた。

雨があがった。

村人は大川（小鮎川）の深い淵（ふち）の岸に、お礼に出向いた。

竜神さまの好物の、お神酒、おだんご、卵を供えて、手を合わせた。

「竜神さま、竜神さま、この度、救われました。本当にありがとうございました。竜神さまとの
お約束どうり、山の手入れをし、ここに生きる全てのものを、大切にいたします」

「竜神さまのお約束を、代々守り育てて、まえます」

すると、深い淵（ふち）の底から、竜神さまの声が聞こえた。

「おぬし達が、約束を守るのであれば、この地方を豊かな地とすると約束しよう。」

「忘れるで、ないぞ。良きかな、良きかな」

今でも、大川（小鮎川）の深い淵（ふち）の岸に立って、「ぱんぱん、ぱんぱん」と手を叩くと竜神さまの返答が返ってくると、言い伝えられている。